

水の都

庄野潤三

河出書房新社

水の都

©1978

著者 庄野潤三

昭和五十三年四月二十六日 初版発行
昭和五十三年六月二十八日 再版発行

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社 河出書房新社

〒102 東京都新宿区住吉町九五

電話 (〇三)三五五―五三一―〈営業〉

(〇三)三五五―五三二―〈編集〉

振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

水 の 都

必ずしも商家に限らないが、古い大阪の街なかの空気を吸って大きくなった人に会って、いろいろ話を聞いてみたらどうだろう。

おじいさんかおばあさんのいる家なら、なおい。

——去年の十二月のはじめに、所用で大阪へ出かけて、中之島のホテルに泊った。その翌日、近くを妻と散歩しているうちに、思いがけず戦災に会わなかったいくつかの建物を見かけたのが、どうやらきつかけとなつたらしい。年が明けてから、時折、そんなことを考えるようになった。自然、口にも出す。

或る日、いつものように昼御飯を食べ終つて掘り炬燵で一服していると、妻が、

「悦郎さんに会つてみたらどうかしら」

といった。

悦郎さんというのは、妻のひとつ年下の従弟で、父親は小さい頃に亡くなったが、高麗橋で茶道具屋をしていたお祖父さんのあとを嗣いで、これまで商売を続けている。いまは芦屋にいる。

「もうずっと会っていないから、全然分らないけど。ただ、坂田のうちというのが親戚中から頼りにされていたの。何かあった時は、先ず坂田の伯父の意見を聞いてみようということになるの」「なるほど。ジョンソン大博士のような人であったのか」

英国人は物事の判断に迷った場合、先ずジョンソン大博士がどういつているかを調べてみて、その意見に従う。そんな話を前に読んだことがある。

よけいな半畳を入れたが、妻は構わずに続けた。

「とにかく、そういう感じでした。子供だからよく分らないけど。何かあると相談に行くの。きっと頼りになったんでしょね」

ここでひとつ付け加えておかなくてはいけない。いま、私の妻が、

「坂田の伯父」

といったけれども、本当はこれは正しくない。その名前で呼ばれるべき人は、もうこの世にいないのだから。では、どうして「坂田のお祖父さん」でなくて「坂田の伯父」もしくは「坂田の伯父さん」となったのだろう。

悦郎さんには姉と妹が一人ずついる。この幼い三人の父親に代って養育を引受けたお祖父さん

が、死んだ「坂田の伯父」の呼び名をそのまま引きついだというふうな想像も成り立つかも知れない。

もっとも、お祖母さんの方は、悦郎さんたちのお母さんがちゃんといえるから、「坂田のお祖母さん」と呼ばれていたそうである。

「また親切な、そういう世話をよくする人だったの、坂田の伯父が。親戚中の尊敬の的だったの」

妻の父も早くに亡くなっている。

「このお祖父さんに仕込まれたんでしょう、悦郎さんは。きっと固くやって来たとと思うの、商売の方は。とにかくいままで続いているんですから」

「いや、それは間違いないだろう」

毎年、年賀状をくれる。こちらも出す。それだけのつき合いではあるが、折目正しいという印象がある。

「坂田の伯父が生きているうちに会っておけばよかったんだけど。つき合いも広く、信用の厚い人だったらしいから、古い大阪のいろんな話を聞かせて貰えたでしょうね」

「仕様がな。こちらの心がけが悪かった。元気でおられる時には、まるでそういうふうに頭が働かなかったんだから」

「そうですね」

「われわれの結婚式にも出席してくれた。戦争が終って半年もたたない、万事不自由な時だから、面倒をおかけしたと思うんだけど。あれがおいしくつくらいったのかな」

「七十いくつでしたか。いちばん年上だったのね、来て下さった方の中で」

ビルが建つので芦屋へ引越すことになるまで、高麗橋に十年あまりはおられたのだから、訪ねて行けば会ってくれただろう。そのうち、こちらは東京へ来てしまった。確か八十八か九になるまで元気でおられたように聞いている。

「でもね、悦郎さんはよく覚えていると思うの。一緒にいた間が長かったから。兵隊から帰ってからお店を手伝うようになったのね」

お祖父さんと孫という間柄も心をそそのめるものがある。何だか唐突で、そんなことをいい出すのは気が引けるが、もし死んだお祖父さんの思い出を話して貰えるなら有難い。

「子供の時分にはよく会ったの。法事とか家びらきとかいうと、親戚がみんな寄るでしょう」

「どういうふうだった、悦郎さんの印象は」

「みんな騒ぐでしょう、一緒になると、ああいう時は。ところが、悦郎さんはいつでもしかめっ面しているような子だったの。青い顔をして」

「神経質だったのかな」

「そうですね。ちょっと取っつき難いところがあった」

そういつてから妻は、

「でも、分らないわ、いまはどうなっているか。茶道具屋さんというのはお茶会の世話なんかもするんでしょう」

「いや、知らない」

「私もよく知らないけど、そういう席でお点前をしないとイケないでしょう」

「それは大変だ」

親戚の子供がみんな燥いでいる時にひとりだけしかめっ面をしていた悦郎さんでも、大人になればそうはゆかないだろう。浮世の荒波をくぐらねばならない。ましてやお得意さんあつての商売となると、なおのことだろう。

親の七光りではない、お祖父さんの七光りはあつただろう。だが、それだけによけい難しかったかも知れない。何かといえ、立派であつたお祖父さんとくらべられるのではたまらない。

「あ、それからひとつ、思い出したんですけど」

と妻はいった。

「悦郎さんのところ、三人でしょう、子供が。上があさちゃん」

安佐と書くんですって、

「下がこいちゃん。ひろというんだけど、末っ子だから。悦郎さんだけが悦郎さん、なの。坂田のうちだけでなくて親戚中がみんなそういうふうと呼ぶの。小さい時から」

「なるほど」

「大人が呼ぶ時でも子供同士で呼ぶ時でもそうなの。ほかはみな、ちゃん附けなのに」

といって、妻は幼い頃に呼んでいた通りの名前を、いくつか口に出してみせた。

「悦郎さんだけ違うの。いとこの中でもちよっと別格のようになっていたの。父が早く死んだから、跡取りという気持があったんでしょね」

妻は従弟の悦郎さんに手紙を出した。すると、一週間くらいして、夜、電話がかかって来た。役に立つかどうか分らないが、お目にかかりましょうという返事であった。

「二月いっぱい割合に閑です」

と悦郎さんはいった。

その後、もう一度連絡を取って、二月二日の二時に、この前、泊った中之島のホテルのロビーで会う約束をした。こちらは妻と二人で出かける。部屋を取っておいて、そこで話を聞かせて貰うようにした方が落着いていいだろう。あとで夕御飯と一緒に食べるという段取りも決まった。私は悦郎さんに聞いてみた。

「お酒はお上りになりますか」

「頂きます。両刀使いです」

甘い物も好き、酒も嫌いな方ではないというから、心強い。

「その代り、聞いて下さい。こっちは何をしゃべったらええやら分りませんから。分つてることやったら、何でも答えます」

ついでに、お祖父さんが何か雑誌にでも書かれたものが残っていましたら、といいかけると、
「何もありまへん。大体、字はあんまり書かん方です。小学校も行つてないくらいですから」

「日記なんかは」

「つけてません。何にも無しです」

さっぱりしたものである。どうやら私の妻が覚えている、いくらかひ弱そうな悦郎さんとは違つていようだ。茶人の世界に関係していながら、気取りの無いのが有難い。

中之島のホテルへは三十分くらい早く入った。

予約してあつた部屋は九階で、窓際に立つと真下にやわらかな日差しを浴びた堂島川が見えた。向い合つて話を聞くのにちょうどいい椅子とテーブルがある。

十五分前に私たちは下へおり、悦郎さんを待つことにする。ロビーは満員で、向う側の一段高くなつたところへ行つてみると、空いたテーブルがひとつあつた。灰皿から消し忘れた煙草の煙

が上っていた。

妻は、ここにいて下さい、私はあつちで待っていますからといって戻った。ちょうどそこへコートを着た悦郎さんが入って来た。私はおりて行って挨拶をした。

背は私よりも高く、がっしりした身体つきをしている。

「部屋へ行きましょうか」

九階までエレベーターで上る。向うも早目に来てくれたので、二時になるまでに私たちは明るい窓際の席についた。

「高麗橋のおうちへ一回、寄せて頂いたことがあるんです、二人で」と妻はいった。

「岡山へ行く切符を坂田の伯父さんに頼んで取って貰ったの。それで、朝早く起きて、お宅へ寄って、その足で大阪駅へ行ったんです」

「いつ頃です」

「結婚して間なしです。三月です。その時、悦郎さんがおられて、小さいお膳を出してくれたの」

「覚えてませんか」

「二十一年の三月。初めて母のいる岡山へ帰った時です」

「いや、私も覚えていないんです」

と私はいった。

「悦郎さんにその時、お目にかかっているというんですが。切符を取っておいて貰いながら、申し訳ないんですけど」

「いや、こっちも忘れてるんやから、あいこです」

「何だか上の空でいたみたいで」

「それは無理ない。新婚早々やもの。これから旅行へ出かけようという時に寄りはったんなら、気もそぞろなんが当り前ですわ」

ひとしきり笑ってから、紅茶を頼みましようかと妻がいつて、電話で注文した。

茶道具屋さんというのはどういうことをするのか、いちばん最初に聞きたかったことから尋ねてみた。すると、悦郎さんは、

「私らは美術商というんです」

といった。

世間では美術商といわゆる骨董屋、道具屋と同じと思っているが、それは間違い。美術商は昔は苗字帯刀を許された。骨董屋は何々屋という屋号だけ。よく町を歩いていると、

「何でも買います」

という看板を出している店を見かけるが、あれとは違う。美術商もある程度、家に品物を並べてはいる。だが、お得意さんが決まっている。知らない人がふらりと入って来て、茶碗見せてくれということは無い。

ところが、われわれ美術商は商売をするについて警察の鑑札が要る。お得意さんから預かった品物をよそのお客さんに買って頂く。つまり、委託販売ということになる。これは全部同じ鑑札、小売りも卸しもみな一緒。

「貴金属から古着屋、自転車屋まで全部同じです」

どうしてそういうところへ自転車屋が入るのか、初めて聞く私たちには不思議な気がするが、仕方がない。とにかく、警察の鑑札を持っていなければいけないということだけはこれで分かった。

次に悦郎さんは、美術商の中に茶道具屋があり、さらにその茶道具屋が抹茶道具屋と煎茶道具屋の二つに分れるという説明をしてくれた。抹茶道具屋がまたいくつもの流派に分れる。表千家、裏千家、官休庵の三つを三千家といい、これが主なもので、ほかに沢山ある。で、その中の表千家に坂田は属している。

鑑札からいきなり茶道の世界へ飛び込んだようで、ますます分らない。もともとこちらにお茶に対する興味が欠けているのだから、やむを得ない。私の妻は、女学校の頃に「坂田の伯父」に

紹介して貰って、高麗橋の先生のところへお茶を習いに行っていたから、私より少しはましかも知れない。

その先生はいうまでもなく表千家であったのだろう。また、岡山にいる「難波の伯父」(この人が妻の母の長兄に当る)のところへ母と一緒に疎開していた間は、表千家の先生がいないので、二人の従姉妹と一緒に石州の先生に習ったといっている。

ついでにここで附け加えると、悦郎さんのお父さんはこの「難波の伯父」の二人目の弟で、望まれて大阪の坂田の家へ養子に入った。妻の母のすぐ上の兄で、兄妹の中でも二人は格別仲がよかったらしい。

紅茶が運ばれて来たので、暫く休憩する。

私は同じ市内といっても南の外れに近く、家を一步離れると、とんぼ取りの好きな子には(実際、私がそうであった)宝庫といってもいいような葱畑や野原、田圃、水草の茂る池の多かった帝塚山で大きくなった。

物心がついた頃には、

「大阪市住吉区住吉町」

であったが、市に編入されたのが大正十四年、私の数え五つの年だから、この所書きはいわばなり立てのほやほやというべきものであった。その前までは、大阪府東成郡住吉村だから、畑や

田圃が多かった筈である。

（つい最近になって遅まきながら分ったのだが、何でもこの時、一遍に大阪市の人口が二百万にふくれ上って、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルリン、シカゴに次ぐ世界で六番目の都市になったという）

そんなわけで、街なかの暮しを知らない。一方、私の妻は築港の生れで、一面、見渡す限りの芦原の間を大阪で初めての市電が花園橋から築港棧橋まで走って、市民をびっくりさせたという明治三十六年九月十二日よりもう少し時代は下るけれども、端っこであることには変りはない。外れ同士が一緒になった。生れ在所は同じ浪花でありながら、いわゆる郷土の匂いというもの、中心部に育った人たちにくらべるとよほど薄くなっている。若い頃はそれを何とも思わなかったのに、近頃になって少しばかり物足りなく感じるようになったのは、東京へ引越してから二十年以上の年月がたったことと関係があるかも知れない。

紅茶を飲み終ると、妻は前もって打ち合せてあった通り、部屋から退出することにした。私は、一時間くらいいたったら、一度、様子を見に戻って来るようにいつつけた。

「どうぞごゆっくり」

妻はそういつて出て行った。

「では始めますか。それで、その茶道具屋さんはいつから始められたんですか」